

第2章

総括評価



1 趣旨

グローバル化が進展する中で、あらゆる分野で国境を越えた協力・調整・交渉が不可欠となっており、国際社会・地域社会等でグローバル化対応を牽引・指導する次世代リーダーが必要となっている。

次世代グローバルリーダー事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」(以下「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」)は、「世界青年の船」事業から続いている事業の成果を継承しつつ、そうした時代の要求に応えるべく、国際社会及び地域社会等においてリーダーシップを発揮し、広く社会に貢献できる青年を育成するとの目的で実施したものである。

よって、本事業は、多様なバックグラウンドを持つ青年が世界各地から集い、ディスカッションや文化交流、有識者によるセミナー、参加青年が主体となった自主活動やワークショップなど様々な活動を通じて、主に異文化対応力やコミュニケーション力を高める、リーダーシップやマネジメント力の向上を図る、参加青年の国際的視野を広げ、国際協調の精神を育て、社会貢献活動へ寄与する意識を高める、の三点を達成目標としている。

また、本事業は、日本と参加各国との友好親善を深めるとともに人材育成を通じての国際貢献を目指すものであり、外交的な観点からの役割も担っている。さらに、事業実施後の参加青年のネットワークの形成が図られることによって、事業目的が更に促進されるものであり、今後の展開が期待される。

本事業では、具体的達成目標に到達するために、陸上研修、船上研修及び訪問国活動を実施しているが、本年度は4年ぶりの海外航路の運航により、ある程度の長期間の船上研修が確保できたことでプログラムの充実を図ることができた。

まず、陸上研修及び船上研修においては、共同生活を通してそれぞれのバックグラウンドを持つ参加青年たちが互いの理解を深めるだけでなく、「青年の社会貢献」を共通テーマとして六つのグループ(地域づくり、防災、教育、環境、情報・メディア、青年起業)に分かれ、コース・ディスカッションを行った。

加えて、事業の三本柱ともなる「異文化理解」「リーダーシップ」「プロジェクトマネジメント」についての

有識者セミナーを行うことで、参加青年の国際的視野を広げ、社会貢献活動への理解を深め、具体的な活動計画を企画・立案することができる力を付けさせることを目指した。

また、海外航路となったことにより、船上研修期間をより多く確保できたことから、参加青年の主体性や自主性を促進させることができる取組を多く取り入れることとした。具体的には、参加青年が主体となって企画する「参加青年セミナー」「ナショナル・プレゼンテーション」「文化紹介活動(クラブ活動)」「委員会活動」を始め、参加青年が自由な発想で様々な活動を企画・立案する「自主活動」の時間を多く設けることによって、参加青年が、コミュニケーション能力を高め、リーダーシップを発揮し得る体験をするよう、提供された公式プログラムだけでなく、より自主性をもって活動するように促し、社会貢献活動に寄与する意識を一層高めるとともに、実行力を付けるための取組を行った。

訪問国活動においては、各コース・ディスカッションのテーマに沿った施設先を訪問し、各分野における取組を学び地域の文化や歴史への理解を深め、さらに、公式行事への参加を通じて親善を深めるとともに国際儀礼を身に付けるための取組等を行った。

本事業の成果を測るため、全参加青年を対象に事業終了後に事業参加についてのアンケート評価を行った。アンケート評価の数値基準は、5段階評価(評価の高い方から5~1)とした。

また、全参加青年に対して、10項目の能力並びに自己認識評価の伸び幅について、事業実施前と実施後に比較する調査を行った。評価の数値基準は、6段階評価(評価の高い方から6~1)を基本とした。さらに、研修を通じての将来への考え方の変化の比較を行った。評価の数値基準は、4段階(評価の高い方から4~1)とした。

加えて、今年度から全日本参加青年に対してIDI調査(異文化感受性発達調査)を行った。(参加青年に対して行った事業評価アンケート並びに能力向上、参加青年の将来への考え、自己認識評価及び日本参加青年に対して行ったIDI調査の詳細については、「第7章 事業に対する評価・提言等」参照)

2 評価結果

事業目的の達成度

異文化対応力やコミュニケーション力を高める

異文化対応力やコミュニケーション力の向上については、参加青年へのアンケート結果に加えて、DMIS（異文化感受性発達モデル）に基づいて開発されたIDI（異文化感受性発達調査）を通じて検証する。

参加青年へのアンケート調査における、「事業への参加が自己啓発に役立つと思いますか」との問いに対し、異文化対応力の項目に対して、3（役立つ）以上が96%であり、5（際立って役立つ）が49%と高い評価となった。コミュニケーション力の項目に対しては、3（役立つ）以上は93%であった。この数値は、いずれも前年を大きく上回っている。（前年度、それぞれ86%及び78%）

また、参加青年の能力向上の自己評価で最も高い伸びを示したのが「異文化対応力」であり、0.8ポイント増となった。特に日本参加青年では、1.2ポイントの伸びを示し、事業による影響力が非常に高かったことがうかがえる。

IDI調査の中で、日本参加青年の「発達度」の値は、事業前は89.62であったが、事業後には、92.25と変化した。なお、米国に留学している学部生に関する先行研究には、この変化が留学生活1.5年程度に相当することとなるものがあり、短期間で大きな効果があったと評価している。

「この事業から何を学んだか」との問いに対して、日本参加青年からは、「国や文化、習慣などが異なる国の人々と接するときには、常にオープンマインドでいることの重要性」「たとえ住んでいる国や心情が違って、平和や友情、世界に対する思いは同じ」、外国参加青年からは、「異文化間の相互理解について。私たちは違いよりも共通性の方が多い。この事業の環境は理想的な世界」「絶対に文化的背景で集団を評価せず、その人々のふるまいで評価するべきということ」「より偏見の無いコミュニケーション」などのコメントがあった。

リーダーシップやマネジメント力の向上

参加青年へのアンケート調査で、「事業への参加が自己啓発に役立つと思いますか」との問いの中で、リーダーシップの項目に対して、3（役立つ）以上は91%と高い評価を示し、マネジメント力の項目に対しては、3（役立つ）以上が79%であった。

リーダーシップについては、セミナーの回数を増やすことで、リーダーシップについての正しい理解と能力向上を図ったところ、参加青年のセミナーへの評価は、4（良い）以上が86%となり、前年度の取組より

高い評価を得た。（前年度78%）

日本参加青年からは、「自分自身のリーダーシップのスタイルや、自己管理・グループ運営のこと」や「誰でもリーダーになれるし、そのリーダーシップのスタイルはそれぞれ違う」ことを学んだとのコメントが、外国参加青年からは、「背景の違う人々と一緒に物事を進めていく能力、リーダーシップに関する新しい考え」を学んだ、「自分の人生を再評価し、意欲的なリーダーとしての役割について考えることができた」などのコメントがあった。

相互理解を深め、参加青年の国際的視野を広げ、国際協調の精神を育て、社会活動へ寄与する意識を高める

参加青年へのアンケート調査において、「このプログラムはあなたと他国の人々との相互理解に役立つと思いますか」との問いに対して、4（そう思う）以上は96%以上であり、参加青年が、本事業を国境を越えた相互理解に資するものとして評価していることがわかる。また、「この事業は、社会貢献活動に参加したいという意欲を高めると思いますか」との問いに対しては、4（そう思う）以上は91%であり、特に外国参加青年の65%が5（非常にそう思う）と評価している。

また、後述する「参加青年の将来における考え」の比較調査では、「国際的なキャリアもしくはボランティア活動に携わりたい」「仕事もしくはボランティア活動を通じて社会貢献をしたい」の項目に対して、数値の伸びが大きく表れており、こうした数値からも社会貢献活動に寄与する意識が向上していると評価している。

以上の分析から、三点の目標は、十分に達成できたと評価している。

事業の満足度

事業全体については、参加青年全体では4（良い）以上は83%となり、特に外国参加青年は数値が高く、4以上が90%となった。また、事業の軸となる「コース・ディスカッション」に対しての評価は、4（良い）以上は63%であり、前年度とほぼ同等な評価であった。（前年度65%）。

最も参加青年の満足度の高い活動は、「ナショナル・プレゼンテーション」及び「クラブ活動」であり、活動に当たって自らの創造性を発揮できる活動に満足度が高い（両活動に対する評価は、5段階評価の4以上が、それぞれ97%、91%）。特にクラブ活動は、船上研修が長くなったことにより、十分な時間設定ができるようになったプログラムである。さらに、アンケート調査結果によ

れば、多くの参加青年が文化交流や自己啓発、さらに、海外との人的ネットワークの構築を目的の一つとして参加したことがうかがえ、こうした青年の参加動機も背景にあると考えられる。

更に参加青年に対して、本事業の人生や社会への関わりについて評価するため、「本事業を通じて、人生や社会に対する見方が変化したと思うか」と質問したところ、88%の参加青年は、「そう思う」又は「非常にそう思う」と回答した。「人生の目的と方向性を定めることができた」「この事業からたくさんのことを学び、私のターニングポイントとなった」「社会のために良い活動をしたいという気持ちが高まった」「この事業はすばらしく、人生を変えるような体験だ」等のコメントが多く寄せられたことから、本事業が参加青年に良い影響を与えていると評価している。

参加青年の成長

能力の向上

全参加青年について、事業実施前と実施後の10項目の能力に係る自己評価に関し、比較を行った。

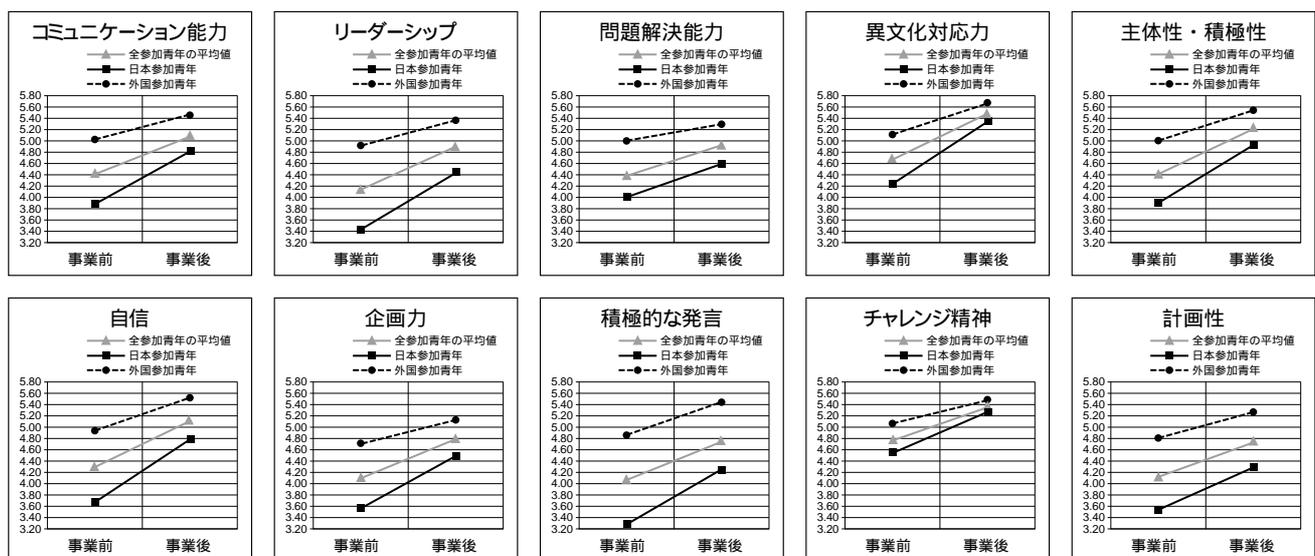
評価段階は6段階（6＝十分備えている、5＝備えている、4＝ある程度備えている、3＝あまり備えていない、2＝備えていない、1＝全く備えていない）とした。この調査において、全参加青年の平均値で特に高い伸び幅を示したのが、「自信」0.9ポイント増（4.3 5.1）（少数点第2位四捨五入、以下同じ）、「異文化対応力」0.8ポイント増（4.7 5.5）、「リーダーシップ」0.8ポイント増（4.1 4.9）、「主体性・積極性」0.8ポイント増（4.4 5.2）、「積極的な発

言」0.8ポイント増（4.0 4.8）であった。また、「問題解決能力」についても0.6ポイント増（4.4 4.9）となり、全体的にその他の評価項目と同様に比較的高い成長率であるといえる。本事業で多様なバックグラウンドを持つ青年との交流を経て、参加青年は、自信や異文化対応力を身に付けたと考えられる。

属性別にみると、日本参加青年については、「リーダーシップ能力」が1.1ポイント増（3.4 4.6）、「異文化対応力」が1.1ポイント増（4.2 5.4）であり、本事業におけるそれぞれの分野において参加青年のリーダーシップ能力及び異文化対応力の成長をみることができた。また、「自信」については1.1ポイント増（3.7 4.8）、「チャレンジ精神」も0.7ポイント増（4.6 5.3）となっており、日本参加青年が、自信やチャレンジしようとする姿勢を向上させたことがわかる。

外国参加青年については、「自信」0.6ポイント増（4.9 5.6）が最も高い伸び率を示した。外国参加青年については事前研修時から平均値が高かったが、本事業への参加により更に自信を高めたといえる。「自信」以外の項目では、「積極的な発言」が0.6ポイント増（4.9 5.4）、「主体性・積極性」が0.5ポイント増（5.0 5.6）となっており、研修の中心であるディスカッションプログラムなどにおいて、参加青年が主体的に活動した成果が見える。「異文化理解」は0.5ポイント増（5.1 5.6）であり、元々の数値が高水準であったため、日本参加青年の成長率の1.2ポイント増に比べ半分以下の伸び率であるが、様々な国籍の参加青年との共同生活は、外国参加青年にとっても成長を促すこととなったことが推察される。

【事業実施前後の能力の伸び幅の比較】



参加青年の将来への考え

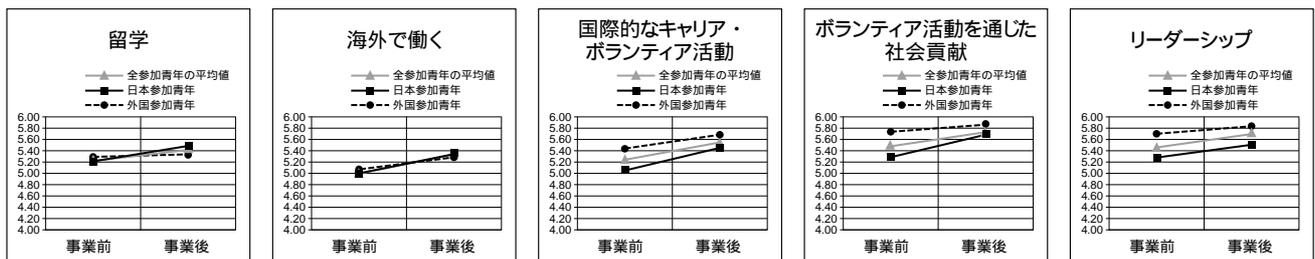
研修の前後において、参加青年の将来における考えを以下の項目で比較した。評価段階は6段階（6=強そう思う、5=そう思う、4=どちらかというと思う、3=どちらかというと思わない、2=そう思わない、1=全く思わない）とした。

全参加青年の平均値で特に高い伸び幅を示したのは、「国際的なキャリアもしくはボランティア活動に携わりたい」が0.3ポイント増（5.3 5.6）、「海外で働きたい」が0.3ポイント増（5.0 5.3）であった。また、他には、「仕事もしくはボランティア活動を通じて社会貢献をしたい」が0.3ポイント増（5.5 5.8）、「自身

のリーダーシップスキルを仕事やボランティア活動でいかしたい」が0.2ポイント増（5.5 5.7）であった。

なお、日本参加青年については、高い伸び率であったのは、「国際的なキャリアもしくはボランティア活動に携わりたい」が0.4ポイント増（5.1 5.5）、「海外で働きたい」が0.4ポイント増（5.0 5.3）、「自身のリーダーシップスキルを仕事やボランティア活動でいかしたい」が0.3ポイント増（5.3 5.7）であった。

また、外国参加青年については、「国際的なキャリアもしくはボランティア活動に携わりたい」が0.2ポイント増（5.5 5.7）、「海外で働きたい」が0.2ポイント増（5.1 5.3）など、比較的伸びが大きかった。



自己認識評価

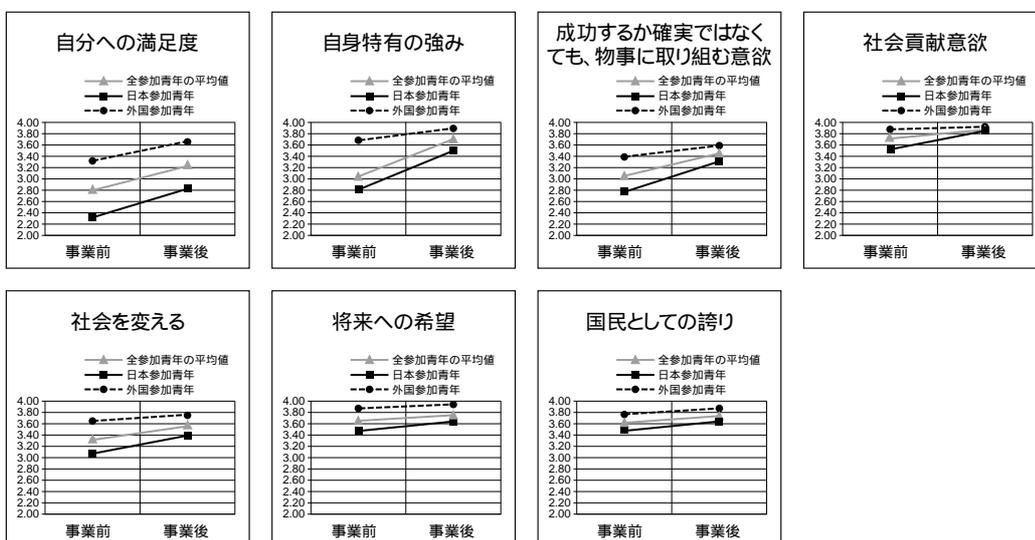
自己認識評価では以下の項目で比較調査を行った。評価段階は4段階（4=強く思う、3=そう思う、2=あまり思わない、1=全く思わない）とした。

全参加青年での平均値で最も伸び率が高かったのは、「自身特有の強みをもっている」の0.5ポイント増（3.2 3.7）であった。次に伸び率が高かったのは、「成功するかは確実ではなくても、物事に取り組む意欲がある」の0.4ポイント増（3.1 3.5）であった。事業期間中、参加青年は他国の青年と共に船内活動に取り組む必要がある環境におかれるが、このような経験をするにより、自身の強みを認識したり、結果が不確実な中であっても物事に取り組む意欲を身に付けたりしたのではないかと考えられる。

また、日本参加青年については、一番高い伸び率を示したのは、「自身特有の強みをもっている」の0.7ポイント増（2.8 3.5）、次に「成功するかは確実ではなくても、物事に取り組む意欲がある」の0.5ポイント増（2.8 3.3）であり、「自分自身に満足している」については、0.5ポイント増（2.3 2.8）であった。

外国参加青年については、一番高い伸び率を示したのは、「自分自身に満足している」の0.3ポイント増（3.3 3.7）、次に「成功するかは確実ではなくても、物事に取り組む意欲がある」の0.2ポイント増（3.4 3.6）、「自身特有の強みをもっている」の0.2ポイント増（3.7 3.9）であった。

この結果をみると、参加青年は、各分野で各々の知識や経験を培うだけでなく、自身の自己認識においても成長したと評価している。



訪問国活動国における評価

海外航路となったことから、参加青年全員による訪問国活動が実現し、受入国であるインド及びスリランカからもハイレベルでの歓迎を受けた。

インドにおいては、寄港地チェンナイが位置するタミル・ナドゥ州の学校教育大臣等の訪問を受けた。

スリランカにおいては、第24回「世界青年の船」事業の寄港の際に続いて、マイトリーパーラ・シリセーナ大統領の船への訪問が実現した。他に、サガラ・ラトナヤケ治安・南部開発担当大臣出席の下で、ラニル・ウィクラマシンハ首相主催昼食会が開催されるとともに、ニロシャン・ペレーラ政策・経済担当大臣への表敬も行われた。

交流対象国からの評価並びに外国参加青年の親日感情の向上

本事業は、外国参加青年の人材育成にも寄与しており、参加各国のNLのほか、政府、在外公館からも高い評価を受けている。また、外国参加青年の親日感情の向上にも大きく貢献している。

アンケート調査の「日本に対する印象は、このプログラムに参加したことで、どのように変わりましたか」という問いに対して、外国参加青年による回答は、4（良

くなった）以上が91%であった。また、「このプログラムからどのようなことを得ましたか」との問いに対して、「日本について理解を深めることができた」と答えた外国参加青年は76%であり、本事業が外国参加青年の親日感情の向上に大きく貢献していることがわかる。

さらに、外国参加青年は、地方プログラムの際にホームステイを体験しており、「ホームステイの体験に満足しましたか」との問いに対しては、4（良い）以上が97%となり非常に高く、ホームステイが日本について理解するために意義深い体験となり、親日感情の向上に大きく貢献していると評価している。

なお、外国参加青年は、帰国後、それぞれの国に所在する我が国の在外公館や各国の関係機関において、本事業の成果についてのプレゼンテーションの実施や、レポートの提出を行った。これらの帰国後の報告に関し、多くの在外公館より、参加青年にとって本事業が非常に有意義なものであったとの報告がなされている。また、例えばタンザニアの参加青年が、帰国後、地元大学生に対し、本事業の成果を講演する場をもつなど、各国において、社会に幅広く本事業で得た成果を広める活動もなされている。

3 結論

評価結果のとおり、参加青年の成長という観点からは、主たる三つの目標を達成し、事業全体についての参加青年からの評価も高かった。さらに、本事業は交流対象国からも高い評価を受けており、国際親善上並びに外交上の観点からも重要な役割を果たした。こうした観点から、本事業は、事業の目的を十分に達成できたと評価している。また、海外航路を実現できたことにより、特に訪問国の関わりをより確保できたほか、船上研修期間が長くなり、事業目的の実現に必要なプログラムを実施できる時間がより確保され、参加青年に対する研修効果を高めることができたと考える。

一方で、期間が長くなったことにより、より一層深いコミュニケーションを求められることになった結果、英語力を始めとする日本参加青年と外国参加青年の能力の格差が顕在化することにもなった。参加青年の選考については、幅広い層からの人材の確保に努力するとともに、選考時から参加までの間に、いかに英語力を始めとする実践的な能力を付けられるかが、事業の効果を一層高めるための一つの課題と考える。